猪飼　周平著

## 病院の世紀の理論

江戸研究者として名高い三田村鳶魚は、関東大震災の翌年の大正十三年の『週刊朝日』に、震災の被害を論じた「焼き払われた名所名物」という文章を寄稿しているが、彼がまず第一に嘆息したのは、この震災で多くの病院が焼けてしまったということであった。震災は、市内の二一三の官公私立の病院のうち一六二を焼失させる壊滅的な打撃を与えた。神田区の五三、日本橋区の二六、京橋区の二十の病院のうち、助かったものは一つもなかった。順天堂病院、慈恵病院、聖路加病院、鉄道病院、杏雲堂病院といった現代まで続く名門の病院の前身も、大震災で焼失した著名な建物に含まれていた。震災被害が甚大であった神田、日本橋、京橋といった「東京の眉目ともいうべき土地」に東京の有名な病院は集中していたのである。

しかし、あらためて考えると、このことは不思議なことではないだろうかと鳶魚は自問する。病気の療養には安静が第一だとしたら、大呉服店や大劇場がならぶ熱気に溢れた繁華街が病気の療養に向いているようには思われないのに、なぜ東京の病院はその地域に集まって建てられたのだろうか？博学な鳶魚にしても、この疑問への答えは持っておらず、その解決を後世の研究者に託した。「考えにくいこの医者および患者の心理状態の闡明（せんめい）は、たしかに現代生活を、後世からの研究者に与える、貴重な部分だと思う。」近代日本の医者はなぜ東京の繁華の地に病院を建てたのか、そして患者はなぜそこにいったのか。九十年前に震災地図を眺めていた鳶魚の頭をよぎった疑問は、本書の中に解答にかなり近いものを見出すだろう。

本書の主張を一言でいえば、日本の医療システムは、開業医が病院を所有するものとして形成されたということである。この医療システムは、イギリスの病院システムとも、アメリカの病院システムとも違ったものであるが、どの国においても、それぞれのシステムは20世紀の医療の要請に密接に結びついて発生したものである。その意味で20世紀は「病院の世紀」なのであると著者は言う。そして、21世紀には、この医療システムは終焉を迎え、疾病の治療から障害のケアへ、そして生活の質と医療が拡散していくなかの一つのサブシステムに組み込まれていくであろうと予想する。この壮大な歴史理論が当たっているかどうかはにわかには確言できない。しかし、この書物は、刺激的で挑戦的な理論を提示することで、医療政策をめぐる議論を軽薄な警鐘乱打から解放して歴史性の深みを与え、医療史を黴臭い好事家趣味から解放して理論と洞察の光を与えるだろう。

本書では、日本のエリート医師たちが公立病院ではなく私的な病院開設に向かう流れ、その中でのキャリアパスの形成などが明晰に説得力をもって描かれている。医者と患者の双方に目配りがされ、昭和期の人々の医療への欲求の高まりは確かな形でくみ上げられ、専門的で高度な教育を受けた開業医が、医療を生計を立てる手段としてよりも、

# 刺激的で挑戦的な理論

## 日本の医療の新しい正当的な解釈に

鈴木　晃仁

A5判・337頁・4200円
有斐閣
978-4-641-17359-0

先端的な進歩をフォローする科学的な営みとして理解するようになった結果、科学から切り離される僻地が新規の開業場所として敬遠された過程が示されている。いずれも読み応えがある優れた解釈である。「医療の社会化」論についての史実と解釈の両面からの徹底的な批判は、傾聴するべき論点を多く含み、日本の医療史の新しい正当的な解釈になるかもしれない。

土着の病院の伝統から自由であった日本の医師たちが建てた「病院」は、西洋の（そして日本の）壮麗な公的な病院とは違い、その多くが木造二階建てで自宅に病室が併設された安上がりで小規模なものであった。猪飼の著作が示唆しているのは、このような建物でも「病院である」と感じさせることができるような方向に、日本が吸収しようとした西欧の医学と病院が進んでいたということである。19世紀の中葉から後半にかけては、ナイチンゲール病棟に代表されるように、広大な敷地に贅沢なパヴィリオン形式の細長い病棟を配した形式の建築が「治療する装置」であるという、病院の建築そのものが注目されていた時期であったのに対し、20世紀は、病院が内部に備えている機械や技術が注目されていく時期であった。病院はX線や検査機器などの先端技術をいれる箱にすぎなくなっていたという流れが、20世紀の医療の流れには確かに存在する。「先端的な病院」が広大な敷地を要するパヴィリオン形式の病院でなければならないのであるとしたら、日本の開業医たちが、特に東京の都心でこれを模倣することは不可能であった。しかし、20世紀には、局在的な機械や技術が、病院が備えるべき最新性のあかしとなったのである。その流れに敏感に反応した日本の医療システムが安上がりな私立病院に依存するようになったことは、西洋の医学と病院から、その新たな本質の一つを選び取って日本の現状にあわせた結果とも考えることができる。しかし、皮肉な見方をすれば、ウサギ小屋と嘲笑われた狭小な住宅に最新型家電を詰め込むことが消費の最前線であったかつての日本とそれほど変わらない姿だとも考えられる。そして、最先端の技術が優れた医療の第一の証ではなくなりつつある徴候が現れている21世紀の医療が、どんな方向に進めばよいかという問いを考える上で、本書は豊かな思考の糧を与えてくれるであろう。（すずき・あきひと氏＝慶應義塾大学教授・医学史専攻）

★いかい・しゅうへい氏は一橋大学准教授・社会政策・医療政策・医療史専攻。東京大学卒。一九七一（昭和46）年生。